

《全学年》

(資料6) から、全学年の分析・考察を行った。

[全項目を通して]

「あてはまる」と「ややあてはまる」を合計した割合で見ると、⑦を除いた全項目で5年生が最も高い割合を示し、次いで3年生、2年生の順になっている。

このような結果になった理由としては、児童生徒の級友への関心が、3年生では、遊びの仲間を中心とした小グループに向く傾向があり、5年生では学級全体を強く意識する傾向が強まり、2年生になると友達を選ぶようになり、学級全体の級友より特定の級友に向きがちになってくることや、自分自身を見つめる目が厳しくなっていることが考えられる。

[他者にかかわろうとする思い] (③④⑤)

他者にかかわろうとする思いの項目では、「あてはまる」と「ややあてはまる」の合計の割合で、④「みんなと一緒に活動したい」、⑤「みんなのことを大切にしたい」が、3学年とも90%近い結果に対して、③「みんなのことを知りたい」は80%前後の結果となっていることから、3つの思いの中でも「みんなのことを知りたい」という思いは、より能動的な思いであり、相手への関心の高さが関係しているものと考えられる。

また、「あてはまる」の回答では、③が学年が進むにつれて低い割合となっている。これは知る内容が表面的な特徴や行動などから、好みや興味・関心、考え方や感じ方などの内面的なことへと推移し、とらえることが難しくなっているためや、級友全体への関心が薄れ、特定の級友を求めようとしているためと考えられる。

[他者への思いを伝える技能] (⑥⑦⑧)

他者への思いを伝える技能では、「あてはまる」、「ややあてはまる」と肯定的に回答した児童生徒は、各学年とも70%前後いるものの、これらの半数以上は「ややあてはまる」である。このことから、各学年とも児童生徒の思いを伝える技能は、十分に高まっていない様子がうかがえる。したがって、指

導援助にあたっては、このような児童生徒の存在を踏まえた取り組みが大切である。

(資料6) アンケートの集計結果 (全学年)

